



Title	La Araucanaの投影
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	Estudios Hispánicos. 1993, 17, p. 69-81
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93806
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

La Araucana の投影

吉 田 秀太郎

エルシーリャの作品が当時のスペインの文人たちの間で高い評価を受けていたことはロペやセルバンテスの言葉を引用するまでもないが、しかし正確な意味においてエルシーリャはスペインにおける叙事詩の創始者ではなかった。そのルーツを探れば、コルドバ生まれのローマ叙事詩人ルカーヌスの『内乱期』に至るはずである。この作品は Martín Lasso de Oropesa により1541年にロマンセの形に翻訳された。しかし、それ程遠くまで逆上らなくとも、1561年には Baltazar del Hierro がドン・アルバロ・デ・バサンの偉業を讃えた *Victorios hechos* を書いているし、Luis de Zapata は彼の時代きっての大王の功績を祝って *Carlo famoso* (1566)を出した。これはエルシーリャの *La Araucana* の出る3年前のことである。それから彼に続いて何人かが、とりわけ Juan Rufo は1584年、*Austriada* を書いた。しかし一般には Ercilla の作品が真に *epopeya* 又は *historia en verso* であると考えられてきたわけである。

さてエルシーリャの名声と共に、彼を模倣する詩人が相次いだ。その最初の人物と目されるのは Diego Jiménez de Aillón である。彼の *Los famosos y heroicos hechos del invencible y esforzado caballero el Cid Ruy Díaz de Bibar* はアルカラ・デ・エナレスで1579年に上演されたが、歌章の冒頭と末尾に必らず道徳的な考察を加えた文が現れる点で、エルシーリャの模倣者と見なされている。同様に Pedro de la Verilla Castellanos は *El León de España* (1586年・サラマンカ発行) の冒頭でその詩歌の目的を述べているが、この書き方は彼がいかに *La Araucana* を意識していたかが明瞭である。更に第十三歌章の終りでパルマがカニオ

セコの遺体の上に涙を流すくだりがあるがその文言はエルシーリャがその第二十一歌章でインディオの女性テグワルダが夫の亡骸に涙する個所と酷似している。

この様な事実とは別に、新大陸でもエルシーリャの作品の模倣者が少なくなかったが、彼らに共通して言えることは、作品の舞台が新世界の地であることが第一に挙げられる。更にその詩の主人公は何れもイスパニア人とインディオたちであることだ。そしてこれらの詩人の特徴として、極めて稀な例外を除いて、彼らの讃える英雄的行為に直接関係していることが指摘できる。とりわけ著名な模倣者としてペドロ・デ・オーニャとサンテイステバン・オソリオの名を挙げることができるが、前者は丹念にエルシーリャの足跡を辿った。その様はまさに *servil* といった形容がふさわしい。またホメロスの史詩に近づけようとして詩の中に驚異的な事柄の介入をはかった。

Ercilla の模倣者としてはアメリカ大陸における限り、その最初の人としてガブリエル・ラソ・デ・ラ・ベガ(Gabriel Lasso de la Vega) を挙げることができる。因みに彼に関する情報は少なく、マドリードの生まれでフェリペ二世及び三世の時代に王室に仕えたことくらいしかわかっていない。彼は *Cortés valeroso* を1588年、つまりエルシーリャの作品の第三部がまだ発表されていないときに書いた。そして1594年には十二の歌章を二十五にふやし、更に作品の題名も *La Mexicana* に改めた。この作品の他にもラソは *Elogios de los tres varones famosos* (Don José de Aragón, don Fernando Cartés, don Álvaro de Bazán) を出しているが、この中でコルテスに捧げて、*La Araucana* の一節が挿入されている。なお彼の没年が1615年の10月であったことも判明している。さてラソが *Cortés valeroso* を書いたのは29歳のときで、エルシーリャより7歳若かった。言うまでもなく、彼はメキシコの征服者エルナン・コルテスの偉業を讃えるためにこれを書いたのだが(コルテスがメキシコに入城するまでを記述した) この作品にはそこに用いられている言葉の使い方、地理的な状況から書き始めるというやり方、英雄の口から発せられる大演説、一騎打ちの場面や、更に倫理的な省察を加えながら詩を始める方法、そしてクラウディーナのエピソード、これは *La Araucana* の中のテグワルダやグラウラを想起させるものだが、その他カリアネラを登場させて未来を予言させる点

(これはフィトンを思わせる) など、いかにエルシーリャを模倣しているかが歴然である。

更に言えば、この二つの作品の間の一致点は全般に及んでいる。ただガブリエル・ラソには López de Gómara という先輩のいたことが彼にとって有利だった。因みに、ゴマラが Bernal Díaz del Castillo の *Historia verdadera de la conquista de la Nueva España* の成立に当って大きな刺戟となったことは周知の通りである。ところで、*Cortés valeroso* に現れる主要なヒーローたちの一連の行動はこの作品に統一性を一貫性のあるものになっている。

その次に来る人物は Antonio de Saavedra Guzmán である。さきに見たエルナン・コルテスとその部下の隊長たちの武勲を讃えた *Peregrino Indiano* (1599) は、先ずこの作品の成立過程においてエルシーリャの場合と状況が似ている。エルシーリャは戦闘の暇を見て、夜分に思いついた事を書きとめたのだが、サアベドラ・グスマンも夜、テントの中で原稿を書いた。彼は7年間に亘って資料を集めたのち、メキシコからイスパニアへの復路の70日間を費して完成した。彼もまたエルシーリャ同様、自分の書いたことすべてが真実であると自慢した。彼はこの地に生まれた人間として、インディオたちの風習を細かくみごとに描き上げている。

Martín del Barco Centena という人物もオクタバの形式で *Argentina y conquista del Río de la Plata* (1602) を書いたが、彼もまた詩人であると同時に征服という事業に自ら加わった一人である。彼はラプラタ地域の事だけでなく、ペルーにおけるいくつかの出来事についても言及しているが、さすがにチリーの事については一切触れていない。そのわけはもちろんエルシーリャの作品に敬意を表してのことだった。彼の謙虚さがうかがわれて好感が持てる。

一方、Gaspar de Villagro の *La conquista de la Nueva México* にもエルシーリャの影が、ほんのりとではあるが投ぜられている。侵入者イスパニア人に対する土着民の懸命の戦いを描くことによってその愛国心が浮彫りにされている。

アメリカ大陸における史詩においてエルシーリャの影響がどの程度まで及んだかは、今まで述べてきた事で理解できるが、さてチリーについてはどうであろうか。

チリでは *La Araucana* の扱っている内容からして当然のことながらその影響ははるかに大きい。大別して、先ずエルシーリャの作品を補おうとした人、次に彼の名声を利用して物語りを続けようとした人（彼の書かなかった部分を書こうとした人）の二つに分けることができる。散文で書いた人もいれば韻文の人もいる。前者の中では、チリーにおけるエルシーリャの同僚で一兵卒だった Alonso de Góngora Marmolejo が代表的である。彼はイスパニアのインディアス諮問会議長 Juan de Ovando への献辞の中で次のように述べている。

「発見されて以後長年に亘ったこのチリの国での幾多の苦しみと不幸は、その住民が好戦的であるだけにインディアスの他のどの地域におけるよりも大きかったが、これまで誰一人散文でその模様を書くという労をとらなかったのも私は敢えてそれを試みすることにした。この土地に Don García Hurtado de Mendoza と共に僅かの期間いた Alonso de Ercilla という人物がここで起った事柄を *La Araucana* の中で書いているが、この国の事情を知るには十分とは言えない分量なので、私は最初から今日に至るまでの事を書き、皆にまだ知られていないことを書き洩らすことのないようにしたい…。」彼は1575年までのできごとを書き綴った。その題は *Historia de Chile* である。

チリにおける *La Araucana* の模倣者と云えば最も有名なのがペドロ・デ・オーニャである。正確には Pedro de Oña Acurcio Villegas であり、かつてイスパニア人とアラウカ人との間の激戦のあった心臓部とも云うべき Angol の出身である。1570年に生まれ、1643年、恐らくペルーのクスコの辺で世を去った。オーニャの問題の作品は *Arauco domado* と言い、ホセ・トリビオ・メディナが BAEXXIX にある1854年のマドリード版を基に1917年最初の校訂版を出してから漸く知られるに至った。その後、近年になって Salvador Dinamarca による作品研究や Raúl Porras Barrenechea のオーニャの生涯に関する研究に続いて Fernando Alegría の研究などが現れるに至って決定的な評価を得る様になった。それまではとかく存在の影の薄い作品であり、それが証拠に1596年に初版が出る際も、教会の許可があるかどうか不明ということではしばらく保留されたこともあった。

オーニャの伝証的側面を調べてみると、彼の生まれた1570年は、彼の父 don Gregorio 隊長がアラウカ人の手にかゝって戦死した年でもある。Luis

Alberto Sánchezによると、オーニャの母方の曾祖父 Pedro Villegas は Pedro de Valdivia を経済的に援助し、彼と共にチリー征服に加わった人である。ドン・グレゴリオはドニャ・イサベル・デ・アクシオ・ビリェガスと結婚したが、この女性はその後夫の死後ドン・クリストバル・デ・クエバと再婚した。オーニャは1590年頃リマのイエズス会の経営するColegio San Martín に学んだ。1594年にはすでに *Arauco domado* をほとんど書き終えていた。アナ・エフライン・デ・ロス・ゴドスと結婚し5人の子をもうけていたが、妻に先立たれ1605年ヌエバ・エスパーニャ出身のドニャ・ベアトリス・デ・ロハスと再婚した。因みにこの年 *Arauco domado* の第二版がマドリードから出ている。

1602年頃からオーニャは色々な出版物の序文を書く仕事に携った。リマにいた頃に、*El temblor de Lima en 1609* や当時の副王モンテスクラロス侯爵のために書かれた83のオクタバから成る *Canción real* を発表した。1629年には *El lgnacio de Cantabria* を書いた。ロペはその翌年に出た *Laurel de Apolo* の中でこの作品に言及している。又、1635年4月にクスコで書いたチンチョン伯爵への献辞のある *El Vasauero* はそれから300年の間、未刊のままだった。この様にオーニャは *Arauco domado* の他にも韻文による著作があり、例のディナマルカの研究によるとオクタバ・レアルで書かれた詩行の総数は実に4万5千行にのぼる。20歳のときに書き始めたとして65歳までの45年間に年平均千行書いたことになり、ロペの多作ぶりには到底かなわないがしかし大したものと言える。因みに *Arauco domoda* は19の歌章から成り、1250のオクタバ、1万詩行に及ぶ。

さてエルシーリャの *La Araneana* とオーニャの *Arauco domado* の比較を試みてみよう。まず両方の作品の間には若干の共通点がある。たとえばエルシーリャは2ヶ年近くチリにいたが、オーニャは先にも述べたようにエルシーニャの描くイスパニア人とアラウコ人との戦の中心地ともいえるところに生まれている。また二人とも作品を書いたのは若い頃のことであつた。とりわけオーニャの場合はそうだった。ただ、一方が兵士として戦いに加わったのに対し、オーニャの方は神学生だった点が異なっている。トリビオ・メディナは対照的なこととしてエルシーリャが若い頃、宮廷の絢爛さと文明世界の一流の場で過ごしたことがあるのに対して、オーニャは同じ歳頃文明にはおよそ無関係な生地の森林とそこに住む粗野な征服者

たちと、リマの社会の僅かな文化に接したに過ぎなかった点を挙げ、この点で二人の魂の構成要素は実に相反していると述べている。しかし、オーニャがルネサンスの教養を身につけていたことは今日周知のことである。*La Araucana* の作者の靈感は歴史的な事実を尊重するという規制しか知らなかったのに対し *Aranco domado* の作者のそれはドン・ガルシアの功績を称えるという至上命令に拘束されていた。フェルナンド・アレグリアも彼のことを *Poesía chilena* (1953) の中で *rectificador de Eracilla y panegirista de don Garcia Hurtado de Mendoza* と言っている。アレグリアも述べている通り、オーニャの目的はドン・ガルシアを称える他に、エルシーリャの誤りを正すことにあった。その賞讃のし方もやや大袈裟であった。アラウコの地における彼の行動のみならず、副王になって後の行動（例えばキトにおける *Alcabalas* の反乱鎮圧など）にも及んでいる。けだしバロック的な風潮はオーニャの周辺にもすでに達していたのである。オーニャのドン・ガルシアに対する敬意は更にエスカレートし、先に挙げた *El Vasauro* では当時の副王の先祖のカブレラ家がいかに武勲の誉高い名門であるかを9840の詩行を費して述べている。

しかしオーニャには37歳も年上の、しかもいまや著名なエルシーリャの高さには到底達し得ないのだと理解するだけの謙虚さがあった。そのことは彼の作品の中に十分読み取ることができる。ところで、アラウカ人に対するオーニャの立場はこれまで述べてきた事にも拘らずエルシーリャのそれに極めて近い。すなわち、好意的である。そしてまた、オーニャの登場させる27人の人物はすでにエルシーリャの作品に現れているものだが、その他にもチリの歴史上の人物と、専らオーニャの詩人としての空想の産物も含めて45人も多い。また、彼が女性を詳しく描写するのに大変熱心だった事はタッソーやアリオストなどを読んだ事を、つまり彼のルネサンス的教養を示す何よりの証拠である。カウポリカンとフレシアの恋物語はそのよい例である。

二人の作風の明白な違い（二人ともオクタバという形式の詩であるがそこには際立った文体上の差異がある）にも拘らず、ここで明確にしておかねばならぬことは、オーニャが秘かなライバル意識を抱いて書いたのではないということである。オーニャははっきりと自分はエルシーリャの模倣者であると言っている。文学的な面では同じでもその目的が二人はそれぞ

れ異なっている。エルシーリャは戦いの場にドン・ガルシアをちょっとしたぞかせただけで、読者の注意を専らインディオたちの行動に向かわせようとした。彼はインディオの勇敢な態度とその愛国心に強い印象を受けてこの叙事詩を書いた。オーニャはインディオたちの尊厳性を完全に奪い去りはしなかったものの、当時のペルーの副王だった英雄の勇気と勝利を讃えようとした。

Canto el valor, las armas, el gobierno
 Discanto aviso, maña, fortaleza,
 Entono el pecho, el ánimo y nobleza
 Del extremado en todo joven tierno:
 Hinche la fama ahora el áureo cuerno,
 Apreste de sus alas la presteza,
 Redoble su garganta el claro Apolo,
 Y llévese esta voz de polo á polo.

詩はこの様な書き出しで始まり、ペルー副王、Don Andrés Hartado にチリから救援の願いが届き、そして彼が息子の Don García を快く派遣した模様が述べられる。ドン・ガルシアは帆船に乗って、すさまじい嵐の中を戦場へと向う。一方酔っ払ったインディオたちは予言者から、彼らを待ち受けている運命を聞く。上陸したイスパニア人は先ず陣地を築く。一方サンティアゴからは援軍が到着する。その間ドン・ガルシアの敗北を見んものと地獄が集ってくる。そしてインディオの隊長に早速その陣地を攻め落す好機の到来したことを知らすべくメヘラを派遣することを決める。

元老院は酋長たちに呼びかけてアラウコ人を集め攻撃をしかけるが攻防戦をくり展げるうちに次第に運はドン・ガルシアに向いてくる。

続いて色々な合戦があり、それにインディオたちの恋物語りが挿入される。魔女キドラはキトにおける有名な反乱を物語ろうとし、またドン・ガルシアはチリ遠征の後四年経ってペルー副王となる。時あたかもイギリスの海賊リチャード・ホーキンスと戦い勝利を収める。

以上がこの *epopeya* の大筋である。この作品には明らかに計画上の欠点があり、筋の脈絡のなさも目立つ。また通時的なできごとの順が不同であ

る事が多い。第一、エルシーリヤの場合と異なり、つまり実際に戦いに参加した事がないために、この叙事詩の中味は殆んどエピソードで綴られている。この様に文学作品としては不可欠な統一性や趣味のよさといった基本的なルールを破ってまでも作者はドン・ガルシアの行為と性格を浮彫りにし、彼を讃えることが彼にとっては至上命令だったと考えられる。従って両者を敢えて比べてみれば *Ercilla* の優位は歴然である。しかも第十六歌章でも述べている通り、オーニャは時間に追われていた。エルシーリヤの場合と大いに異なる点である。エルシーリヤが時間をかけ、絶えず推敲を重ねたことはこの詩人の研究家として名高いホセ・トリビオ・メディナの指摘を待つまでもない。

En el discurso largo, el tiempo breve,
Cortísimo el caudal de parte mía,
Y danme tanta priesa cada día,
Que no me dejan ir como se debe;
Por donde si á disgusto el verso mueve,
No yendo tal(señor) como podía,
Es porque va, cual sale de su tronco.
Así con su cortesa, rudo y bronco.
En obra de tres meses que han corrido,
He yo también corrido hasta este canto ...

さてエルシーリヤの模倣という見地から見てみると、先ず筋書きはオーニャの場合、*La Araucana* で述べられている第一部の最終章以後から始まっている。歴史的なことを差し引いても、インディオたちの風習の描写といい、人物の設定と叙述の仕方、そして比喩の使い方、更には文体の優雅さの点でも *Arauco domado* は *La Araucana* を踏襲している。その他、象徴的な人物を登上させるとか、そしてその人物に未来の予見をさせるといった筋の展開においても同様のことが言える。エルシーリヤの作品ではベローナという戦いの女神が登場し、この女神が詩人にヨーロッパで起りつつある出来事を話すのであるが、一方、オーニャの作品ではメヘーラという不和の女神が現れ、カウポリカンにドン・ガルシアの軍を攻略すべき

好機（アウロ）の到来を知らせる役割を演じる。また、*Arauco domado* 中の酋長とフレシアとの恋のエピソードはエルシーリャの作品の中のラウタローとグワコルダのそれを彷彿させる。同様に、グワレバスが傷を負ったトゥカペルに対して抱く悲痛な感情の表現はまさしくエルシーリャの作品の中でテグワルダが夫の亡骸の上で表わす悲しみと酷似している。ただ、オーニャの場合は描写が少し長過ぎる嫌いはあるが。またキドラの登場と所業はエルシーリャの魔術師フィトンのそれを明らかに模倣したものである。この様にしてオーニャはエルシーリャをエピソードや叙事詩の構成そのものにおいて真似ている。

La Araucana の与えたインパクトのもう一つの例証としてドン・ディエゴ・デ・サンティステバン・オソリオの書いた *Quarta y quinta parte de la Araucana* を紹介する。言うまでもなく、エルシーリャは *La Araucana* を第三部まで書いた。従ってサンティステバンの作品は、ちょうどセルバンテスの名作『ドンキホーテ』に対する、アベリャネーダの同名の作品に相当する。ただし、アベリャネーダの偽作は『ドン・キホーテ』の第一部、または前篇の出たところで現れ、そのことにセルバンテスは腹を立て、発奮して第二部つまり続篇を書いたのであったが、エルシーリャにはもはやその気力はなかった。けだし著名な文学作品の持つ宿命の一つかも知れない。後世のイスパノアメリカの文学では、例えば『マルティン・フィエロ』がその好例と言えよう。

さてオーニャの作品が出たのは1596年だったがサンティステバンの作品は1597年、スペインはサラマンカで出版された。これは大変な稀覯本であり、ホセ・トリビオ・メディナの詳しい紹介がある。1598年にはバルセロナで再版されていることから、かなり当時は読まれたものらしい。全部で二十の歌章から成る。*La Araucana* の第三部が出たのが1589年のことだから、その8年後に発表されたことになる。作者のサンティステバンはスペインはレオンの出身である。彼自身の言によれば、彼が若い頃、この作品を書いたとある。他にも彼は *La Guerra de Malta y toma de Rodas* を1598年に発表している。当時の印刷許可証などから彼がダミアン・デ・サンティステバン・ビリュガスの息子であり、父子とも、又その祖先も国王に仕えたことがわかる。また出版申請書を受付けたレオン市の教区代表者は詩人が詩の中で讃えるべき事の記述は «muchu verdad y puntuali-

dad» で以てなされており、この事に関して作者自身、この物語が技巧を脱ぎ捨てたものであり、もしこ作品に何らかの欠点ありとすればそれは彼の二十二歳という経験不足によるものだから容赦願いたいと述べている。このことから、出版許可の年を1596年として、サンティステバン・オソリオは多分1573年に生まれたものと考えられる。彼はまた *La Belgicana* と題するこれまたオクタバの形式による詩を書いている。これはフランドル地方の戦いを描いたもので三部からなる。

さて *La Araucana* の続きを書こうとした作者の意図がどの辺にあったかを見てみよう。彼はその序でこう述べている。

「南半球の遙かな土地での物語が人々に非常に歓迎されているため、私は（大変苦しみながらですが）その物語の続きを書き、完成させたいと思ったのです。と申しますのも、こうする事によってすべての愛好家たちのお役に立てるし、私もこの詩を優れた手腕で書いた人に対する恩義に報いることにあると考えるからです。そして私が乏しい才能を省ず彼の書いたその続きを書きそれを完成させようとしたことが余りにも大胆な行為だとお考えの向はどうかその様にお考えになりませぬ様に、また彼と競い合うために書いたのだとお考えになりませぬ様、読者諸氏にお願いいたします。私は自分のことをよく承知いたしております。また才能の乏しさがもたらす結果についても解っています。どうか、目を労作によって諸氏のために役立ちたいという私の気持の方に向けてください。そうすれば私としても言い訳がききますし、青二才の陥りやすい欠点を許してもらえることになりましょう。私は自分の苦勞に対し、感謝して欲しいなどとは思いませんし、いわんやお世辞の賞めことばも望みません。名誉と賞讃は十分それに値する人に与えられるべきです。彼の作品は私のより優れており文体も高度であるとは言え、私の気持には敵わない筈です。」

更に詩行を書き始めてからも何度となく自分の意図するものがエルシーリャの作品と競い合うことにあるのではないと強調している。

Y si a alguno parece atrevimiento
Que su historia inmortal haya tomado
Prosiguiendo adelante y con el cuento,
Que indeciso quedaba y destroncado,

Respondo, que no fué mi pensamiento
 Usurparle la fama que ha ganado,
 Sino acabar el punto de su historia,
 Siendo suyo el laurel, suya la gloria.

この偽作『ラ・アラウカーナ』の文学的価値の検討はさておき、ストーリーの概略を見ることによってこの作品の模倣がどこまで及んでいるかを知ることができる。次に挙げる第十三歌章の詩節は形容詞や名詞の羅列が特徴的である。

Canto las armas y furor de Marte,
 Horrible, cruel, fantástico, sangriento,
 Temerario, imparcial, terrible en parte,
 Riguroso, colérico y violento:
 La industria, fuerza, maña, aviso, el arte,
 La destrucción, conquista, el rompimiento,
 Las españolas fuenzas levantadas
 En juveniles pechos alteradas.

これはエルシーリヤの作品にしばしば見られる特徴であるが、サンティステバン・オソリオの場合、詩の中に真の意味の命題に欠けるし、又一貫した invocación つまり、詩神の靈感を祈る言葉がない。

エルシーリヤの作品はアラウカ軍の総大将カウポリカンの処刑があって間もなく終るが、さてその後、統卒者を失ったインディオたちはそれを選出すべく主だった酋長がオンゴルモの盆地に集合したとオソリオは想像する。その会合では各自自分が最適任者と考えたため一大論争が始まり、エルシーリヤの場合と同様、老練の分別あるコロコロが決着をつける。そして酋長たちはその老人の提案に従い投票を行う。真珠の飾りつきの黒檀の投票箱がしつらえられ、そこにトゥカペルかカウポリカン二世の名を書いて投票する。そして後者が結局同国人たちの意志によって選出される。

ところで Reinoso 隊長のヤナコーナ、つまりイスパニア側に従うインディオだが、アンドレシーリョがアラウカ人がタルカグワノの盆地に陣地を

築いて防衛の態勢を整えているという知らせをもたらす。これによって、ドン・ガルシアの率いるイスパニア軍と酋長アイナビーリヨ、カウポリカンなどとの間に数度にわたる合戦が起る。続いて詩人はラ・インペリアル要塞をめぐる双方の戦いの様が、結局はミリャラウコがレイノーズによって敗北を喫するところまで描かれる。

第二部では戦いという主要な事柄から離れて、エルシーリヤの行った架空の冒険について語る。彼は酋長ミタヨと出逢うがその男はドン・ガルシアにキトで起っていること、又チリの地方で起っていることを話す。これによってわれわれはサンティステバンがオーニャの *Arauco domado* を読んでいたことを知ることができる。最後に、ベロナの出現がある。この神は詩人に歌を続けるよう激励し、彼をとある庭園に導き入れる。そこには9柱のミューズの神がいて神話や異教の神々の功績を称えて詠っている。一台の車があり、その上に Fe と Esperanza と Caridad が乗っている。ベロナ神はパビア、レパント、サン・カンタンにおける歴史上の出来事について話した後、彼をそこに残して立去ると代りに一人の老人が現れる。老衰して皺だらけの顔で目は小さく額は狭く、顎ひげが長く伸び、頭には髪の毛が一本もない。見るだけで尊敬の念が湧いて来る人物である。この個所は *La Araucana* で見たフィトンの生き写しである。その老人は彼に次の様に忠告する。そなたは長い間に亘って作業を企て今やその終りに近づいている。そこでそれを一そう權威あるものとするために、好戦的なアラウコ人に対するキリスト教徒の勇氣について書き給え、と。次にとある洞窟に連れてゆかれ、その階段のところに宝石で縁どりした鏡を持つ老人の像があった。詩人は好奇心にかられて覗きこむとそこに世界の姿が見えた。案内人は法服の下から聖なる本を取出し、呪文によってゾロアスターを呼び出す。彼は響き亘る声でオランの勝利を語る。ベローナ神は詩人に古代の夢を見させる。夢から覚めると再び彼はアラウコの地にいてインディオの敗北を見続けている。エポナモンはそのとき大へんな災難を見て気の毒に思い、すみやかに地獄の如き猛々しき心持つ者よ集まれと命じる。この個所は作者サンティステバンの古代神話についての造詣の深さを思わせるところである。

会議が開かれ、スペイン人を迫害することが決まるとエポナモンは雲に乗って飛びアラウコ人の処まで来るとその雲から竜を送り出す。竜はアラ

ウコ人の勝利を約束し、戦うよう鼓舞する。インディオたちは高揚し戦いを開始する。しかし間もなく隊長たちは敗北し勇敢なカウポリカンも苦戦の末、遂にドン・ガルシアの手中に身を委ねる。

以上が大筋であるが全体の調和に欠けまだでき事の順も不同である。且つフィクションに関して云えばすべてエルシーリャの模倣以外の何物でもない。

La Araucana を模倣した詩の中で最も重要なのは以上の二つで、いずれも16世紀末に出たものである。

その他にも Hernando Alvarez de Toledo や Alonso de Ovalle 神父などの著作の中にそれらしきものが見られる程度である。

参考資料

1. Alegría, Fernando: *La poesía chilena. Orígenes y desarrollo. Del siglo XVI al XIX.* Fondo de cultura económica. México, 1953.
2. Barrenechea, Porras: *Nuevos datos sobre la vida del poeta chileno Pedro de Oña.* Mercurio Peruano, vol. XXXIII, Núm. 308, Lima, 1952.
3. Bleiberg, Germán, y Marías, Julián: *Diccionario de la literatura española.* Revista de Occidente; Madrid, 1964.
4. Dinamarca, Salvador: *Estudio del Arauco domado de Pedro de Oña.* Hispanic Institute, New York, 1952.
5. Pla, Roger: *Diccionario de la literatura universal (a-e).* Muchnik Editores, Buenos Aires, 1966.
6. Sánchez, Luis Alberto: *Escritores representativos de América. Primera parte.* Ed. Gredos, Madrid, 1971.
7. Toribio Medina, José: *La Araucana. Ilustraciones.* Imprenta Rlzeviriana, Santiago de Chile, 1918.